

## 梵文普賢行願讚

泉 芳 璟

—  
本稿を草する目的は梵文普賢行願讚の比較的正確なる本文の提供とその諸譯に對する比較講讀をなさんとするにある。

梵文普賢行願讚は夙に既に日本に傳へられ慈雲門下の日本梵學界の諸哲は努力して研鑽し、又屢々これを引用してゐる。これを近代にしては南條先生がマックスミュラー翁の許で梵語研究に従事せられた時分、梵文阿彌陀經、梵文金剛經、梵文般若心經等と共に、日本所傳の梵本の一として日本から送致せられた筈である。然るに如何したわけかこの普賢行願讚の梵本は先生に於て全く手を着けられた形跡がない。笠原氏はこれを研究する準備をしてゐたと聞くが、果して如何なる程度までやつてあつたのか詳かでない。これが整理せられて出版せられたのは一九一二年渡邊海旭氏の左記の一論文を以て最初とする。

Die Bhadracarī, eine Probe buddhistisch-religiöser Lyrik untersucht und herausgegeben —

Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde der Philosophischen Fakultät der Kaiser  
Wilhelms-universität zu Strassburg vorgelegt von Kaikyoku Watanabe aus Tokio. Leipzig Druck  
von G. Kreyling 1912.

これはストラスブルグの大學でロイマン教授の下に研究せられた學位論文で、予は曾て同氏から  
一本の寄贈を得て筐底に愛藏したが、或る事情で紛失したゝめ、本稿を草するに當り、諸方面を問  
合せたが得られず、漸くのこと某氏を煩はして佛教専門學校所藏の一本を借覽し得た。本書には既  
に梵文普賢行願讚の正しい本文とその校異を載せ、主要なる用語の索引あり、ロイマン教授の獨逸  
譯あり、加ふるに梵文普賢行願讚に關する殆んど總ての問題を網羅してあり、もはやこれ以上に何  
等附加する必要は無いやうである。

<sup>註(一)</sup>併し本書は今日では幾分稀觀書の部に屬してゐるから、一寸容易に見るわけに行かぬ。それに予  
としては明治四十二年(一九〇九年)に無盡燈第十四卷第二號及第六號に亘り『梵文普賢行願讚の研  
究』と題し、僅かにその一部分、單に諸譯(即ち支那二譯と西藏譯)の比較對照を出して居る。これ  
は現今から見れば甚だ不十分なもので、當時故ありてこの研究をそのまゝに中止したるため、今日  
に至るまで何とかしてこの宿債を果さばやの念慮止み難きものがある。

<sup>註(二)</sup>それにもう一つ、予はこのごろ故ありて自分の手寫した華嚴入法界品の梵本を若干部同好諸士の

間に頒布した。この最後の部分なる普賢行願讃は曾て渡邊海旭氏の刊本を以て異同を加へて置いたと思つてゐた。隨て頒布本にもそう斷つて置いた。然るに本文を點檢して予は何等異同を書き加へてゐないことを發見した。蓋し豫定だけであつて作業は實現しなかつたものらしい。そんなわけで梵文普賢行願讃の本文提供は差し迫つて予の義務であるやうにも感ぜられて來た。時恰も大谷學報の原稿を依囑せられ、これは無盡燈誌の後身でもあり宿債を果すつもりでこの稿を執筆するにした。

註(一)予は東京方面であらゆる手段を盡して本書を搜索して見たが得られなかつた。丙午社から渡邊氏の梵文普賢行願讃が出版されてゐるといふ廣告を見て早速一本を購ふために照會して見た。尤もこの廣告は明治四十三年出版の立花俊道氏の巴利語文典の包紙の裏面に載せてある。高島米峰氏よりの返事に云く『渡邊君の梵文普賢行願讃は今に出版に至らず、恐らく永久に出版せられざるべし』。古い廣告を輕々しく信じた自分の愚直さを苦笑した。

註(二)全部で千五百頁以上もある予のノウトを謄寫版に附して完成したのは和歌山の須佐晋龍氏である。その勞作は殆んど奇蹟的である。此にこの機會を利用して同氏の多大なる努力に深き敬意を表明し置く。

## 二

梵文普賢行願讃は全部で六十二頌(或る傳本は六十三頌或るものは六十五頌)から成る。古來略華嚴經であるといふ傳説がある位で、大乘行者の生活を顯示して餘蘊なく、十大誓願殷懃によく長行に照應し、極樂世界に生じて阿彌陀佛を見ると云ふに至つては是れ淨土教先驅の隨一と謂ふべきである。普賢とは華嚴經を始め大乘經典の大立物であり。時としては大乘の行そのものを普賢と呼

ぶ。所謂人普賢は前者であり、法普賢と云ふのが後者である。今その孰れなるにしても、普賢によりて引き出さるゝ行願、行とは大乘行者の生活であり、願はその懷抱する目的である。即ち禮佛、懺悔、隨喜等の作業と及び同時にこれに伴ふ誓願を顯はす。行の示す願なるか、行に保持せられたる願なるか、將た又行と願との意なるか、見方は種々あらむも、要するに大乘佛教の信條を遺憾なく表現したものと謂ふべきである。

普賢行願讃は四十華嚴の最後の部分であり、隨て梵文ガンダヴェーハの最後に附加せられてゐる。併しこれは獨立して世に行はれ、それ自身の標題を有する。それは場所によつて種々に異つてゐる。先づ日本傳本では

*Bhadracarī nāma samantabhadra-praṇidhānam*

と云ひ、ネバールの傳本では

*Bhadracarīpraṇidhāna* 若くは

*Ārya-Bhadracarī-(mahā-) praṇidhāna-rāja*

と云ひ、西藏傳本には

*Ārya-Samantabhadra-caryā-praṇidhāna-rāja*

と見え、又西藏五部の註釋の中、二部は



Bhadracariprañihāna-tāja

とあり、三部は單に

Bhadracariprañihāna

と云ふ、寂天は梵文大乘集菩薩學論に

Bhadracaryā(-gāthā)

として引用してゐる。蓋し Bhadra は Samantabhadra の略稱にして、cari は caryā の俗語形である。この讃頌の造られた當初はこの略稱とこの俗語形を以て呼ばれたらしい。それが後代になるに随つて次第に純梵語の名稱に還元せられたものと思はれる。

普賢行願讃の成立は餘程早いと思はれる。既に六十華嚴の譯者なる佛陀跋陀羅によつて文殊師利發願經と題して翻譯されたのが晋の元熙二年である。この年は永初元年で西紀四二〇年である。出三藏記集第九に記第十九の番號でこれを出して居り、經の後記に出づと註して『外國の四部の衆、禮佛の時多く此經を誦して以て發願し佛道を求む』と見て居る。これで見ても早くから印度佛教徒の間には僧俗を論せずこの讃文の讀誦が盛んに行はれたことが知られる。又第七世紀に屬する密教の儀軌、成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌經といふものゝ中には左のやうな文が見えて居る。

『即ち道場に入り、尊容を瞻仰すること眞佛に對するが如く、虔恭稽首して至心に想を運び、盡

虚空遍法界の一切諸佛及び菩薩を想禮し、既に禮拜し已りて右膝を地に着け、合掌して心こころに當て、閉目して專意に普賢行願一遍を誦し、一心に遍ねく諸佛菩薩を緣じ、應に定心に普賢行願の一々の句義を思惟し、大歡喜難遭の想を發すべし。』

この儀軌は標題の示す如く妙法蓮華經の禮拜供養に關するものであるが、而も尙この普賢行願の讀誦と一々の句義の專心思惟が勧められてゐる。この種の讀誦は佛教初門の課程となり形式的のものとなつた觀がある。それは宋高僧傳第一の不空傳の中に不空が非凡の少年であつたことを述べる所に『文殊普賢行願を誦するに一年の限を再夕にして終る、其の敏利皆此の類なり。』とあるにても知られる。宋高僧傳は端拱元年十月に成つたとあれば、西紀九八八年である。これはこの頃に印度佛教徒の間に普賢行願讃の行はれた證左といふべきだ。

日本には夙に梵文も傳はり梵文の讀誦すら行はれて居る。現今に至るまでも貞元所譯の經本よりて『我昔所造諸惡業』の讃誦の響は香の烟と共に殿堂の内から昇りつゝある。

洵にこの偈頌は二千年來東洋の大乗佛教國の民心を鼓舞し來つた點に於て輕々の觀をなしてはならぬ重要さを有つものと謂ふべきである。

### 三

支那譯の最も古きは前出の文殊師利發願經であらう。これは偈數も不足して居るから現存の梵文

とは一致しない。併し譯は逐字的でないが達意に於て却て新譯より優れてゐる。又興味あることはその題號の文殊師利發願經と呼ばれる點である。文殊は普賢と表現の立場が異なるだけであつて寂照不二であると取扱はれる。併し或る時代——それもこの譯が出来た頃あたりのかなり早い時代には恚うした名で呼ばれたことがあるといふことが知られる。

次に第二譯は唐の代宗の朝（七六三—七七九）に不空三藏によつて普賢菩薩行願讚と題するものが出た。これは現存梵本と最もよく一致するものである。

次に第三譯とも稱すべきは貞元十二年（七九六）六月五日起首して同十四年二月二十四日進獻せりと傳へられる四十華嚴の最後にある偈頌である。これは般若の譯であり、現存梵本と大體一致するものである。

行願品疏鈔によるに『上二本（晋譯と不空譯）並に云ふ。是れ賢吉祥菩薩の説く所なりと。良に以みるに普賢と賢首と名義相濫し、又多く別行するが故に昔の三藏は佛經に非ずと謂<sup>おも</sup>へり。』とある。これで見ると晋譯や不空譯には何處かに賢吉祥菩薩の所造と云ふことが附加されてあつたものなればならぬ。現今藏中にあるものは兩譯共に如何なる出版本にも是の如き文字を見ない。仍て思ふに或る時代には賢吉祥菩薩所造の讚として行はれたものを、後に華嚴大經の中へ攝屬せしめたので、その別行のものから賢吉祥菩薩所造の文字を削除したものであらう。宗密は普賢と賢首と名義

相濫すと云つてゐるが、予にはさう思へない。何となれば普賢は Samantabhadra であり、賢首は Bhadrāsī であるとすれば（これを同一と見ることは宗密の説である）、この二つは全然別であつて相互に間違へられるにはあまりに異つた二個の名稱である。若し名義相濫せしものと云はゞ寧ろ Bhadracarī（賢行）と Bhadrāsī（賢首）であらねばならぬ。或る傳本では恐らく、Bhadracarī-prajñāhāna が Bhadrāsī-prajñāhāna となつてゐたであらう。それから賢首或は賢吉祥の所造となつたものであらう。或は又他の傳本では Manjuśī（文殊師利）となつてゐなかつたと云ふ保證がなし得よう。これやがて文殊師利發願經なる晉譯を生ずるに至つたものではないだらうか。宗密は自分の意見を敍べて次のやうに云つてゐる、

『余の意亦謂へらく、實に是れ賢首菩薩經中に於て行願の意を錄出し、讃文を述成せしならむ。

即ち前二譯の文意爾るべし。然も未だ敢て指南せず』（疏鈔五、五紙）

敢て指南せずと躊躇しては居るが、これは賢首なる或る一人の作者を認めて居るものである。夫れ或は然らむ。併し賢首なる人の如何なるものなるやも明かでなく、寧ろ普賢の略稱 Bhadrā carī が carī と誤られて附加せしものと見るならばやはり作者は誰ともわからぬとするより他に途はあるまい。

但し別行に就ては一言を要する。この讃頌は確かに或る時代——それも早い時代に別行せられて

居つた。併しそれが華嚴經の中へ取り入れられたのは餘程後代のことである。少くとも六十華嚴八十華嚴が譯された時代、即ち西紀第七世紀の終り頃まではこの讃頌は別行して傳へられた。それから更に百年を経て貞元經即ち四十華嚴の譯が成つた。この時にはもう經典の中へ取り込まれてゐる。然し四十華嚴の作者は單に普賢行願讃を取り入れたのみならず、これに相當する長行即ち散文の部分をすら添加した。このことは左の根據に本づく予の想像である。

(一) この讃頌は賢吉祥菩薩の所作なりとの古説あること。

(二) 早き時代から別行せられ、文殊師利發願經等の別譯あること。

かくして取り入れられた讃頌は復び切り離されて別行された形跡がある。即ち現今ネパールに傳へられてゐるものがその冒頭に散文の部分若干残してゐるので知られる。ネパール所傳のガンダヴユーハに長行の部分を缺くのは多分何れかの時代に脱落したものであらう。

かくの如く別行時代、加入時代、再別行時代と三段の徑路を取つたものなることは疑ない。

#### 四

普賢行願讃の梵文は南北兩系に分れると見るのが渡邊氏の意見である。而して北方系のものにはネパールの寫本と西藏の版本とが屬する。予はネパール寫本とこの西藏傳本を同一類のものとしたくない。これを別種のものとする。己に北方系にネパール西藏の二傳本を認める以上、今他の一傳

本即ち渡邊氏の所謂南方系なるものを改めて日本傳本と呼ぶことにする。

これは第六世紀から第八世紀に至る間に密教が南方印度及び錫蘭に於て非常に隆盛であり、この密教の重要な代表者の一人不空が南方印度地方から多くの密教經典を支那へ將來した。その中にこの普賢行願讃があつたのである。この梵本が日本へ傳へられるやうになつたのだから、たとひ南方印度にその根源はあるにしても既に日本に傳はり久しきを経たものである以上、日本傳本といふ稱呼は決して不當であるまい。

この梵本が支那から日本へ傳へられたのは先づ空海より始まる。空海は西紀八〇四年から同八〇六年まで不空の弟子なる慧果の下に密教を學んだ。隨て彼の手によつて一本が先づ日本へ渡つた。これは將來目錄の示す所である。

即ち御請來目錄に「普賢行願讃一卷五紙」と見えてゐる。三十年の後、空海の弟子圓行は二部の寫本を日本に齎した。即ち八家將來目錄の圓行の下に兩處この梵本が見えて居る。その一は梵漢兩字相對とあるから對譯本らしい、次に圓行の歸朝後八年にして義眞を求めて支那に入つた惠運は更に一部を日本に請來した。惠運禪師將來教法目錄に「普賢行願讃一卷」とあり、又「普賢讚梵語一卷」とある。これが異本なるや同本なるやは詳かでない。八家將來目錄の方では惠運の下に「梵漢普賢行願讃」とあり、更に「文殊行願讃」(原本願を觀に作る)と見えて居る。更に圓仁は少くとも一本を將

來したらしい。それは慈覺大師在唐送進錄に「梵漢對譯普賢行願讚一卷」とあり。又入唐新求聖教目錄にも「唐梵對譯普賢行印(願の誤ならむ)讚一本」と見えて居る。これで都合五本の梵本が日本へ傳へられたわけだ。

併しかく日本へ傳つた五本の中、現存するものは空海の傳本であつて其の他の三本はいつしか所在を失したものでらしい。この空海の傳本は四種の寫本となつて慈雲の手に歸した。そのことは梵篋三本の中の普賢行願讚の序言に見えてゐる。

『梵本四般其所承也、一則無量壽院所藏、一則金剛三昧院所藏、一則得之左海、後批云、總持寺金剛臺、三本並堅書、一則得之攝州小曾根海輪者寄之於予、其文橫書、今之所寫依準橫書、而參伍餘本云、天明三癸卯夏小比丘慈雲敬拜識、』

天明三年は西紀一七八三年であるが、これより十六年以前、明和四年(西紀一七六七)に慈雲が弟子にこの梵文を講じた記録がある。『明和四年正月二十二日より御教授』の識語あり、普賢行願讚聞書と題して十卷より成る。この講義の中には左の如き一節がある。これは梵篋三本の序言の資料となつたものであらうから左に録出する。

『今家四本あり。』

一、高野山無量壽院の古本、其文堅書、一句一行に書之、奥書に云

高野大師御本云、件本醍醐法眼房在之云、以般若寺僧正御本一校了、寛元元年（西紀一二四三）六月十六日於西山法花寺以松橋本書之了、金剛佛子頼、

一、同寺金剛三昧院の本、其文堅書、一行大抵二十字許書之、奥書云、

貞永元年（西紀一二三二）十月二十九日於成多喜房奉書寫了、釋門幽一校了、同年十一月一日相當先師御遠忌開題了、

一、左海雲堂覺洲處得之、其文堅書、奥書云、總持寺金剛臺云、

一、攝州小曾根村海輪と云者持來、其文横書、奥書云、康保三年（西紀九六六）十一月三日奉書寫了明、』

普賢行願讚的示と顯する一本の卷末には左の識語がある。これによつて前掲の不明なる部分が補はれるから左に録出しよう。

『謹校讐三本、文含同異、且銘之末葉以便後之考訂而已、其一則題卷末云

貞永元年（一二三二）十月二十日於成多喜房奉書寫了、釋門幽、

同年十一月朔日相當先師御遠忌開題了、

其一則云、

永和五年（一二七九）正月二十二日沙門永遍將洛陽東寺校正本而書寫於總持寺金剛臺了、篠尾



山總持寺藏本、

其一則云、

高野山無量院(モトノマ) 古本也

明和四年(一七六二) 丁亥七月二十二日領光敬誌、臘二十九、俗五十、』

## 五

(註) 本稿を草するに當り、渡邊氏の出版本を手に入るゝまでに予が日本傳本として使用し得たものに前掲の他に左の二書がある。

普賢行願讚諸譯互證上下(合冊)

識語に『文化乙丑(これは二年で西紀一八〇五)仲夏令豐後智恵子繕寫之、智燈拜(梵名梵字にて書けり)』文化丙寅(三年、一八〇六)

二月九日謹寫 金洲』

梵本普賢行願讚 折本一冊(梵書、片假名にて讀方を附す)

『智積院藏版 天保三年壬辰(一八三二)仲秋小比丘乙雲』の識語及び小跋あり。開版の來由を略記す。

又西藏傳本は *151 x 41 cm* 表紙共十九葉から成る梵筈型の一本で、表紙は黃色、其他は普通の支那製の兩面印刷、一面六行づゝ、ランツァ梵字、西藏字にて音寫せる梵字及び西藏譯を並書してゐる。

予は本書の由來に就て何等知り得ないのを遺憾とする。寺本婉雅氏に隨へば北京で出版されたものであらうとのこと。

尙ほ此の他谷大圖書館にこれと同じ體裁の *Prajāparamitāḥḡaṇasamcaya* の梵本がある。共に金陵の楊仁山氏から南條博士へ贈られ博士から寄託せられたものである。

ネパール傳本は予の手寫せしが *グンダウユーハ* の巻末に存する分、これは東京帝大の藏本を根柢とし、京都帝大の藏本によつて校訂を加へたものである。

以下本文に就て邦譯を施しこれを支那諸譯と比較する。若し必要あらば西藏譯に對照するであらう。本文の異同は渡邊

氏の原典に委しく出づるが故に今此には特に必要ある場合の外はこれを略する。これ一は印刷設備の完全ならざるため誤植を生ずる虞があるからである。尙ほ本文中に出づる訛轉語の表を準備したがこれも誤植を生ずる虞あり、今此には省略する。頌法に關することも渡邊氏の論文に委し。今此に贅せず。

## 本文並に諸譯對照

### 第一頌

यावत् कचि द्दशद्विषि लोके सर्वत्रियध्वनात् नरसिंहाः ।  
तानह वत्समि सर्वि अशेषान्कायानु वाच मेनेन प्रसन्नः ॥ १ ॥

### 第二頌

क्षेत्रज्ञोपमकायप्रमातृः सर्वजिनान करोमि प्रणामम् ।  
सर्वजिनाभिमुखेन मेनेन भद्रचरीप्रणिधानबलेन ॥ २ ॥

(一)十方世界に於て、誰にもあれ、ありとある一切三世に互る人師子なる彼等一切を、残りなく身口意清淨なる我は禮す。

(二)(普)賢行願力の故に、刹塵の如き身量を以て、一切諸佛に對面する(が如き)心を以て、われは一切諸佛に敬禮をなす。

〔晉經〕「身口意清淨 除滅諸垢穢 一心恭敬禮 十方三世佛」<sup>(1)</sup>

「普賢願力故 悉覩見諸佛 一一如來所 一切剎塵禮」<sup>(2)</sup>

〔不空譯〕「所有十方世界中 一切三世人師子 我今禮彼盡無餘 皆以清淨身口意」<sup>(1)</sup>

「身如刹土微塵數 一切如來我悉禮 我以心意對諸佛 以此普賢行願力」<sup>(2)</sup>

〔貞元經〕「所有十方世界中 三世一切人師子 我以清淨身語意 一切徧禮盡無餘」<sup>(1)</sup>

「普賢行願威神力 普現一切如來前 一身復現刹塵身 一一徧禮刹塵佛」<sup>(2)</sup>

梵本第二頌第一句、尼波羅、西藏傳本には共に「身禮」に作る。日本傳本は「身量」。今これに従ふ。晉經「除滅諸垢穢」は梵本に見えず。されど「刹塵禮」は梵本に近きが如し。不空譯は常に梵本の字句を順序通りに直譯するが如し。未だ生硬の嫌を脱せず。その第一頌に於ける第三句第四句の如き寧ろ轉反するを可とせむ。「以此普賢行願力」の如きも第三句とするか、若くは貞元經の如く第一句とするを可とす。貞元經はこの點に於て字句配置宜を得たり。されど第二頌第二句の「普現一切如來前」は寧ろ不空譯の「我以心意對諸佛」を取らむ。

以上二頌澄觀は禮敬諸佛と科せり。これを長行に照すに左の文に相當す。

「善男子、言禮敬諸佛者、所有盡法界、虛空界、十方三世一切佛刹極微塵數諸佛世尊、我以普賢行願力故、起深信解、如對目前、悉以清淨身語意業、常修禮敬、一一佛所、皆現不可說不可說

佛刹極微塵數身、一一身遍禮不可說不可說佛刹極微塵數佛」(下略)

### 第三頌

एकजायि रजोपमबुद्धा बुद्धसुतान निषण्णकु मध्ये ।  
एवमपेक्षत धर्मात्थातुं सर्वधिमुच्यमि पूर्णं जिनेभिः ॥ ३ ॥

### 第四頌

तेषु च अष्टयवर्णसमुद्रान् सर्वस्वराङ्गसमुद्रस्तेभिः ।  
सर्वजिनान गुणान्भक्षमानसानुगतान्सुखमी अहु सर्वान् ॥ ४ ॥

(三)一塵の端に於て、塵(數)に等しき佛あり。佛子等の中に坐せり。かくの如く法界は残りなく一切諸佛を以て充滿せりと我は信ず。

(四)而して彼等無盡の讚嘆海、一切音聲海の音聲を以て、一切勝者の功德を宣説しつゝ彼等一切善逝をわれは讚す。

〔晉 經〕「於一微塵中 見一切諸佛 菩薩衆圍繞 法界塵亦然」<sup>(3)</sup>

「以衆妙音聲 宣揚諸最勝 無量功德海 不可得窮盡」<sup>(4)</sup>

〔不空譯〕「於一塵端如塵佛 諸佛佛子坐其中 如是法界盡無餘 我信諸佛悉充滿」<sup>(3)</sup>

「於彼無盡功德海 以諸音聲功德海 闡揚如來功德時 我常讚嘆諸善逝」<sup>(4)</sup>

「貞元經」「於一塵中塵數佛 各處菩薩衆會中 無盡法界塵亦然 深信諸佛皆充滿」<sup>(3)</sup>

「各以一切音聲海 普出無盡妙言辭 盡於未來一切劫 讚佛甚深功德海」<sup>(4)</sup>

第三頌は第二八頌と比較せよ。文意略ぼ同じ。梵文不空譯と吻合す。晉經の「無量功德海」、貞元經の「甚深功德海」は梵本に當らず。蓋し貞元經の「盡於未來一切劫」等より勘ふるに梵本に異なるべし。

疏は科して稱讚如來とす。これを長行の左の文と照すべし。

「復次善男子、言稱讚如來者、所有盡法界虛空界、十方三世一切刹土、所有極微、一一塵中、皆有一切世界極微塵數佛、一一佛所、皆有菩薩海會圍遶、我當悉以甚深勝解、現前知見、各以出辯才天女、微妙舌根、一一舌根、出無盡音聲海、一一音聲、出一切言辭海、稱揚讚嘆一切如來功德海、窮未來際、相續不斷、盡於法界、無不周遍」(下略)

#### 第五頌

पुष्पवरेभि च माल्यवरेभिर्वाद्यवलेपनस्तनवरेभिः ।  
दीपवरेभि च धूपवरेभिः पूजन तेषु जिनान करोमि ॥५॥

#### 第六頌

वस्त्रवरेभि च गन्धवरेभिश्चूर्णपुटेभि च मेरुसमेभिः ।  
सर्वविशिष्टविभूहवरेभिः पूजन तेषु जिनान करोमि ॥६॥

第七頌

या च अनुत्तर पूज उदारा तानधिमुष्यमि सर्वजिनानाम् ।  
भद्रचरीअधिमुक्तिबलेन वदमि पूजयमी जिनसर्वान् ॥७॥

(五) 最上の華、最上の華鬘、最上の樂器、塗油傘蓋もて、最上の燈明もて、又は最上の燒香もてわれ彼等諸佛に供養をなす。

(六) 最上の衣服もて、最上の香もて、最上の香粉の皿もて、迷盧に等しき一切殊勝なる莊嚴もてわれ彼等諸佛に供養をなす。

(七) 一切諸佛に對し、無上廣大の供養なる彼等を信解せむ。普賢行信解力を以てわれは一切諸佛を禮拜供養せむ。

〔晉經〕「以妙香華鬘 種々諸伎樂 一切妙莊嚴 普供養諸佛」<sup>(9)</sup>

「以普賢行力 無上衆供具 供養於十方 三世一切佛」<sup>(10)</sup>

〔不空譯〕「以勝華鬘及塗香 及以伎樂勝傘蓋 一切嚴具皆殊勝 我悉供養諸如來」<sup>(11)</sup>

「以勝衣服及諸香 末香積聚如須彌 殊勝燈明及燒香 我悉供養諸如來」<sup>(12)</sup>

「所有無上廣供養 我悉勝解諸如來 以普賢行勝解力 我禮供養諸如來」<sup>(13)</sup>

〔貞元〕「以諸最勝妙華鬘 伎樂塗香及傘蓋 如是最勝莊嚴具 我以供養諸如來」<sup>(14)</sup>

「最勝衣服最勝香 末香燒香與燈燭 一一皆如妙高聚 我悉供養諸如來」<sup>(6)</sup>

「我以廣大勝解心 深信一切三世佛 悉以普賢行願力 普徧供養諸如來」<sup>(7)</sup>

第六頌の次に西藏傳本は次の如き一頌あり。

「最上の寶、最上の瓔珞、最上の天の種々なる天蓋(或は敷具)、一切の最上なる幡幢、最上なる旌旗を以てわれは、かれら諸佛に供養をなす。」

尼波羅傳本の或るものは右の一頌と更に次の二頌を加へたり。

「無蓋辯才ある佛子によりてなされたる彼等供養を我は一切諸佛に對し常に刹那刹那に一刹那を以てなすべし。」

「わが世俗諦に近づく勝義諦に近づく供養なる彼等を一切諸佛に對し常に刹那刹那に内外よりわれ信解すべし。」

勿論これ後代の加筆なること疑を容れず。日本傳本及び尼波羅傳本の或るものに於ては第五頌の第三句は第六頌の第三句と入れ替れり。即ち「一切殊勝なる莊嚴もて」と供養を總結して擧げたり。思ふにこれ最も原始的なる形ならむ。この場合第六頌はこれ亦後代の加筆と認むべきなり。今は諸傳本第六頌を缺くものなきを以てこれを存し置く。

第七頌は支那諸譯意義明かならず。晉經は頌の次第前後せり。不空譯及貞元經の第七頌の第一句

第二句、共に梵文に符合せず。

疏はこれを科して廣修供養と云ふ。長行相當の文左の如し。

「復次善男子、言廣修供養者、所有盡法界(中略)種々菩薩海會圍遶、我以普賢行願力故、起深信解、現前知見、悉以上妙諸供養具、而爲供養、所謂(中略)以如是等諸供養具、常爲供養、善男子、諸供養中、法供養最、所謂、如說修行供養、利益衆生供養、攝受衆生供養、代衆生苦供養、勤修善根供養、不捨菩薩業供養、不離菩提心供養、善男子、如前供養無量功德、此法供養、一念功德、百分不及一(中略)是真供養故、此廣大最勝供養、」(下略)

この文に照せば有形の供養に對し無形の法供養を勝れたりと示す一段なり。梵文も、稍や意義明からならざれど、「廣大無上の眞の供養を領解すべし」の意なるものゝ如し。

## 第八頌

यच्च कृतं मयि पापु भवेय्या रागनु द्वेषनु मोहवशेन ।  
कायनु वाच मनेन तथैव नं प्रतिदेशयमी अह सर्वम् ॥८॥

(八)貪瞋癡のために、我によりて造られたる惡業彼等一切を我は身口意を以て懺悔す。

〔晉 經〕「我以貪恚癡 造一切惡行 身口意不善 悔過悉除滅」<sup>(7)</sup>

〔不空譯〕「我曾所作衆罪業 皆由貪欲瞋恚癡 由身口意亦如是 我皆陳說於一切」<sup>(8)</sup>



〔貞元經〕「我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋癡 從身語意之所生 一切我今皆懺悔」<sup>(9)</sup>  
梵文諸譯よく一致す。晉經の「悉除滅」は當らざれど、その「悔過」と云ふもの、不空譯の「陳說」と云ひ、貞元經の「懺悔」と云ふに對比し來ればみな各自に立場を異にして面白し。不空譯最も字義に近し。

疏は科して懺除業障と云ふ。長行の文に云く。

「復次善男子、言懺除業障者、菩薩自念、我於過去無始劫中、由貪瞋癡、發身口意、作諸惡業、無量無邊、若此惡業、有體相者、盡虛空界、不能容受、我今悉以清淨三業、遍於法界極微塵刹一切諸佛菩薩衆前、誠心懺悔、後不復造、恒住淨戒一切功德、」<sup>(下略)</sup>

### 第九頌

यच्च दशदिशि पुण्य जगस्य शैल्यश्चैष्यप्रत्येकजिनानाम् ।  
बुद्धसुतानथ सर्वजिनानां तं अनुमोदयमी श्रुह सर्वम् ॥९॥

(九)十方に於て衆生、學、無學、獨覺、菩薩、一切諸佛の福なる彼等一切をわれは隨喜せむ。

〔晉經〕「一切衆生福 諸聲聞緣覺 菩薩及諸佛 功德悉隨喜」<sup>(8)</sup>

〔不空譯〕「所有十方群生福 有學無學辟支佛 及諸佛子諸如來 我皆隨喜咸一切」<sup>(9)</sup>

〔貞元經〕「十方一切諸衆生 二乘有學及無學 一切如來與菩薩 所有功德皆隨喜」<sup>(10)</sup>

この一頌亦よく一致す。不空譯第四句は例によりて直譯なり。貞元經に於て字句は整理せられたり。福とは原因より云はゞ善根にして結果より云はゞ幸福なり。他の幸福は羨望することあるも隨喜すること難し、大乘菩薩の心事知るべし。

疏は科して隨喜功德と云ふ。

「復次善男子(中略)十方三世一切聲聞及辟支佛、有學無學、所有功德、我皆隨喜、」(下略)

### 第10頌

ये च दशदिशि लोकप्रदीपा बोधि विबुध असङ्गतप्राप्ताः ।  
तानहु सर्वि अयेषमि नाथांश्रु अनुत्तर वर्त्तनतापि ॥ १० ॥

(10) 十方に於て世間の燈なる、覺を證りて無着を得たる、彼等一切導師を、無上法輪を轉せんがためにわれは勸請す。

〔晉 經〕「十方一切佛 初成等正覺 我今悉勸請 轉無上法輪」<sup>(6)</sup>

〔不空譯〕「所有十方世間燈 以證菩提得無染 我皆勸請諸世尊 轉於無上妙法輪」<sup>(10)</sup>

〔貞元經〕「十方所有世間燈 最初成就菩提者 我今一切皆勸請 轉於無上妙法輪」<sup>(10)</sup>

この一頌また大體に於て一致す。晉經並に貞元經第二句に「無着を得たる」の語なきを異とす。疏は科して請轉法輪とす。相當文略して左の如し。

(前略)「而我悉以身口意業種々方便慇懃勸請轉妙法輪」(下略)

第一一頌  
ने ऽपि च निर्बुति दर्शितुकामास्तानभियाचमि प्राञ्जलिभूतः ।  
क्षेत्रज्ञोपमकल्प स्थितनु सर्वज्ञस्य हिताय सुखाय ॥ ११ ॥

(一一) 誰にもあれ涅槃を現せんと欲するものにわれは合掌して請うべし。一切衆生の利のため  
樂のため、刹塵に等しき劫波を住したまへど。

〔晋 經〕「示現涅槃者 合掌恭敬請 住一切塵劫 安樂諸群生」<sup>(10)</sup>

〔不空譯〕「所有欲現涅槃者 我皆於彼合掌請 唯願久住刹塵劫 爲諸群生利安樂」<sup>(11)</sup>

〔貞元經〕「諸佛若欲示涅槃 我悉至誠而勸請 唯願久住刹塵劫 利樂一切諸衆生」<sup>(12)</sup>

この一頌よく一致す。疏は科して請佛住世と云ふ。相當の文左の如し。

(前略)「諸佛如來、將欲示現般涅槃者(中略)我悉勸請、莫入涅槃、經於一切佛刹極微塵劫、爲欲

利樂一切衆生、」(下略)

以上十大願の中前七願了る。後の三願に移るに於て先づ總標回向と科して次の一頌あり。

第一二頌

वदन्पूजनदेशनताय मोदनधेषणयाचनताय ।  
यच्च शुभं मयि संचिनु किंचिद्बोधयि नामयमी ऋतु सर्वम् ॥ १२ ॥

(一二)禮拜、供養、懺悔、隨喜、勸請、請佛住世の故に我によりて集められたる何らかの清淨を一切我れ菩提のために回向せむ。

〔晉經〕「我所集功德 回向施衆生 究竟菩薩行 逮無上菩提」<sup>(n)</sup>

〔不空譯〕「禮拜供養及陳罪 隨喜功德及勸請 我所積集諸功德 悉皆回向於菩提」<sup>(12)</sup>

〔貞元經〕「所有禮讚供養福 請佛住世轉法輪 隨喜懺悔諸善根 回向衆生及佛道」<sup>(13)</sup>

第一句、第二句の語尾は俗語形なり。 *hūyāṃ* と純梵語形の本もあれど今は俗語形を存すべし。第三句の清淨は或は *gunam* とすべし。晉經、不空譯は然りしものゝ如し。第六一頌第四句に同語あり。貞元經の意義稍梵文と異なる。衆生の語梵文に無し。

### 第一三頌

पूजितं भोक्तुं श्रुतीतं बुद्धा ये च धियनि दशद्विणि लोके ।  
ये च ज्ञानागत ते लघु भोक्तुं पूर्वमनोरथ बोधिविबुद्धा ॥ १३ ॥

### 第一四頌

यावत् केचि दशद्विणि क्षेत्रास्ते परिशुद्ध भवन्तु उदारः ।  
बोधिमनुमेच्छन्तेभि जिनेभिर्बुद्धसुतेभि च भोक्तुं प्रपूर्णाः ॥ १४ ॥

(一三)過去の諸佛は供養せられてあれかし、現在十方に在ると未來に在る彼等は輕安なれかし。

意樂圓滿し、覺を證れかし。

(一四)十方に於てありとある如何なる刹土にもあれ、彼等は清淨にして廣大なれかし。菩提樹の下に行ける諸佛と菩薩とを以て充滿してあれかし。

〔晉 經〕「悉供養過去 現在十方佛 願未來世尊 速成菩提道」<sup>(12)</sup>

〔普莊嚴十方 一切諸佛刹 如來坐道場 菩薩衆充滿〕<sup>(13)</sup>

〔不空譯〕「願我供養過去佛 所有現在十方世」<sup>(13a)</sup>

〔所有未來速願我 意願圓滿證菩提 所有十方諸刹土 願我廣大咸清淨〕<sup>(14)</sup>

〔諸佛咸詣覺樹王 諸佛子等皆充滿〕<sup>(15a)</sup>

〔貞元經〕「供養過去諸如來 及與現在十方佛」<sup>(13b)</sup>「未來一切天人師 一切意樂皆圓滿」<sup>(14a)</sup>

〔所有十方一切刹 廣大清淨妙莊嚴 衆會圍繞諸如來 悉在菩提樹王下〕<sup>(15)</sup>

この下諸譯の比較に於て出沒あり。不空譯、貞元經共に第一三頌の第一句第二句は梵文の第一七頌の第一句第二句に當り、此に當らず。故に第一七頌に至るまで半偈づゝ繰り上げざるべからず。貞元經の第一四頌第三句第四句「我願普隨三世學速得成就大菩提」は梵文其他諸譯に相當する文なし。第一三頌より第一七頌に至る諸譯を對照すれば左の如き表を得べし。

貞元經	不空譯	晉經	梵本
13b	13b	12a	13a
14a	14a	12b	13b
15a	14b	13a	14a
15b	15a	13b	14b
16a	15b	14a	15a
16b	16a	14b	15b
17a	16b	15a	16a
17b	17a	15a	16b
13a	13a	—	17a
17b	17b	—	17b

疏は科して常隨佛學とす十大願の第八なり。長行相當の文、「復次善男子、言常隨佛學者、如此娑婆世界毘盧遮那如來（中略）乃至示現入於涅槃如是一切我皆隨學、如今世尊毘盧遮那、」（下略）なり。

されど隨學の句は梵文第一七頌の第一句に移され此に無ければこの科は妥當ならず。慈雲も己に聞書にこれに注意して左の如く云へり。

「自初至第七如長行序、後三願次序不倫、蓋偈梵文聲韻不必拘次第也、清涼後三願歸之者恐不是、」

第一五頌

यावत् क्वचिद्दशद्विगुसञ्ज्ञासि सुखिताः सद् भो नु श्रोताः ।  
सर्वज्ञास्य च धार्मिकु श्रयो भो नु प्रदक्षिणु ऋध्यतु श्लाघा ॥१५॥

第一六頌

बोधिवरिं च श्रुहं चरमाणो भवि जातिस्मरु सर्वगतीषु ।  
सर्वसु जन्मसु ऋणुपपत्ती प्रवजितो श्रुह नित्य भवेया ॥ १६ ॥

(二五) 十方に於て、ありとある如何なる有情も、常に安樂にして無病なれかし。一切衆生に正法の利あれかし。恭順なる意樂は成就せよかし。

(一六) 而してわれ覺行を行じつゝ、一切趣に於て生念者なるべし。生滅ある一切生に於て我は常に出家者たるべし。

〔晉 經〕「令十方衆生 除滅諸煩惱 深解真實義 常得安樂住」<sup>(15)</sup>

「我修菩薩行 成就宿命智 除滅一切障 永盡無有餘」<sup>(16)</sup>

〔不空譯〕「所有十方諸衆生 願我安樂無衆患」<sup>(15b)</sup>

「一切群生獲法利 願得隨順如意心 我當菩提修行時 於諸趣中憶宿命」<sup>(16)</sup>

「若諸生中爲生滅 我皆常當爲出家」<sup>(17a)</sup>

「貞元經」 「十方所有諸衆生 願離憂患常安樂」<sup>(15b)</sup>

「獲得甚深正法利 滅除煩惱盡無餘 我爲菩提修行時 一切趣中成宿命」<sup>(16)</sup>

「常得出家修淨戒 (無垢無缺無穿漏)」<sup>(17b)</sup>

晉經の「除滅諸煩惱」貞元經の「滅除煩惱」は當らず。晉經の「除滅一切障」亦然り。梵文の生念者とは前生の事を記憶するものゝ義なり。「憶宿命」「成宿命」これに當る。

疏科恒順衆生なり。長行相當文、「復次善男子、言恒順衆生者(中略)如是類、我皆於彼、隨順而轉、種々承事、種々供養、」(下略)

### 第十七頌

सर्वजिज्ञाननुशिष्यमालो भद्रचरिं परिपूरयमाणाः ।  
शीलचरिं विमलं परिशुद्धं नित्यमखण्डमच्छिद्र चरेयम् ॥ १७ ॥

(一七)われ一切諸佛に隨學し、(普)賢行を圓滿しつゝ、常に無垢清淨なる戒行を無缺無間に行す  
べし。

「不空譯」 「於諸如來我修學 圓滿普賢行願時」<sup>(13a)</sup>

「戒行無垢恒清淨 常行無缺無孔隙」<sup>(17b)</sup>

「貞元經」 「我隨一切如來學 修習普賢圓滿行」<sup>(13a)</sup>



〔常得出家修淨戒〕無垢無缺無穿漏<sup>(17)</sup>〕

この下不空譯、貞元經の第一句第二句は前の第一三頌と交替し居れど、これより以下疏の科して普皆回向となすものなり。その中に亦十顯あり。この第一七頌と次の第一八頌とを第一の受持の願に當てたり。普皆回向の長行相當文左の如し。

「復次善男子、言普皆回向者、從初禮拜、乃至隨順、所有功德、皆悉回向、」(下略)

### 第一八頌

देवहोमि च नागहोमिर्यक्षकुमारमनुष्यहोमिः ।  
यानि च सर्वहोमिना जगत् सर्वहोमिषु देशि धर्मम् ॥ १८ ॥

(一八)天語、龍語、藥叉語、鳩槃荼語、人語、一切衆生の如何なる語を以ても我は一切語に於て法を示すべし。

〔不空譯〕「天語龍語藥叉語 鳩槃荼語及人語 所有一切群生語 皆爲諸音而說法」<sup>(18)</sup>

〔貞元經〕「天龍夜叉鳩槃荼 乃至人與非人等 所有一切衆生語 悉以諸音而說法」<sup>(18)</sup>

第一七頌までの所、諸譯出沒ありしも此に再び一致し來る。梵文の第三句第四句は「一切語」と云ふ語を重出して甚だ手際惡しき文なり。

第一九頌

पेशलु पारमितास्वभिभुक्तो बोधिधि चित्तु म जातु विमुक्षेत् ।  
ये ऽपि च पापक आवरणीयास्तेषु परिह्यु भोतु अशेषम् ॥१९॥

第二〇頌

कर्मतु क्लेशतु मारपयातो लोकगतीषु विमुक्तु चरेयम् ।  
पद्म यथा सलिलेन अलिसः सूर्य शशी गगनेव असक्तः ॥२०॥

(一九)清淨波羅蜜に於て行じ、又覺のために心更に迷惑せざる彼等に於て、あらゆる罪障は餘す所なく消盡してあれかし。

(二〇)世間道中に於て、業、煩惱、魔境よりわれ解脱を行せむ。蓮華の水に染められざるが如く日月の虚空に於て着せざるが如し。

〔晋 經〕「悉遠離生死 諸魔煩惱業 猶日處虛空 蓮華不着水」<sup>(18)</sup>

〔不空譯〕「妙波羅蜜常加行 不於菩提心生迷 所有衆罪及障礙 悉皆滅盡無有餘」<sup>(19)</sup>

〔於業煩惱及魔境 世間道中得解脱 猶如蓮華不着水 亦如日月不着空』<sup>(20)</sup>

〔貞元經〕「勤修清淨波羅蜜 恒不忘失菩提心 滅除障垢無有餘 一切妙行皆成就」<sup>(19)</sup>

〔於諸惑業及魔境 世間道中得解脱 猶如蓮華不着水 亦如日月不住空』<sup>(20)</sup>

疏科して第二修行二利の願とす。晉經の「悉遠離生死」は當らず。不空譯の妙波羅蜜或は貞元經の清淨波羅蜜の「妙」「清淨」は *peśāla* の語なり。この語佛典中に使用せしは珍らしとす。蓮華日月の喩亦讚頌の體を得たり。

貞元經第二〇偈第三句「蓮華不着水」とは蓮華の(濁)水に染まぬことにして、「日月不住空」とは日月の空に着せざること。これ梵文に照して始めて知らる。

第二一頌

सर्वि अपाय दुःखां प्रशमन्तो सर्वजास्थापयमानः ।  
सर्वजास्य हिताय चरेयं यावत् क्षेत्तपथा दिश तासु ॥ २१ ॥

第二二頌

सह्यचरि अनुवर्तयमानो बोधिचरि परिपूरयमाणः ।  
भद्रचरि च प्रभावयमानः सर्वि ज्ञानगतकल्प चरेयम् ॥ २२ ॥

(二一)一切惡趣の苦を鎮め、一切衆生を安樂に住せしめ、ありとある十方に於て、國土の道あらんに、われは一切衆生の利のために行せむ。

(二二)有情の行に隨順しつゝ、菩提の行を圓滿しつゝ、(普)賢行を修習しつゝ、盡未來劫われは行せむ。

〔普 經〕「徧遊十方土 教化諸群生 除滅惡道苦 具足菩薩行」<sup>(17)</sup>

〔雖隨順世間 不捨菩薩道 盡未來際劫 具修普賢行〕<sup>(18)</sup>

〔不空譯〕「諸惡趣苦願寂靜 一切群生令安樂 於諸群生行利益 乃至十方諸刹土」<sup>(19)</sup>

〔常行隨順諸衆生 菩提妙行令圓滿 普賢行願我修習 我於未來劫修行〕<sup>(20)</sup>

〔貞元經〕「悉除一切惡道苦 等與一切群生樂 如是經於刹塵劫 十方利益恒無盡」<sup>(21)</sup>

〔我常隨順諸衆生 盡於未來一切劫 恒修普賢廣大行 圓滿無上大菩提〕<sup>(22)</sup>

この二頌疏の第三成熟衆生の願と科するもの。

### 第二三頌

ये च समाना मम चर्याये तेभि समानामु नितु भवेया ।  
कायतु वाचतु चेतनतो वा एकचरि प्रणिधान चरेयम् ॥ २३ ॥

### 第二四頌

ये ऽपि च मित्रा मम हितकामा भद्रचरीय निदर्शयिताः ।  
तेभि समानामु नितु भवेया तांश्च ऋहं न विरागयि जातु ॥ २४ ॥

(二三)我と同行する彼等と常に集會せしめよ。われ身語意を以て同一の行願をなすべし。

(二四)我が利益を欲する友、(普)賢行の示現者なる彼等と共に常に集會せむ。我は彼等に對して

決して厭はざるべし。

〔晉經〕「若有同行者 願常集一處 身口意善業 皆悉令同等」<sup>(19)</sup>

〔若遇善知識 開示普賢行 於此菩薩所 親近常不離』<sup>(20)</sup>

〔不空譯〕「所有共我同行者 共彼咸得常聚會 於身口業及意業 同一行願而修習」<sup>(21)</sup>

〔所有善友益我者 爲我示現普賢行 共彼常得而聚會 於彼皆得無厭心』<sup>(22)</sup>

〔貞元經〕「所有共我同行者 於一切處同聚會 身口意業皆同等 一切行願同修學」<sup>(23)</sup>

〔所有益我善知識 爲我顯示普賢行 常願與我同集會 於我常生歡喜心』<sup>(24)</sup>

この二頌疏の第四不離の願と科するもの。

貞元經の第二四偈第二句第三句の讀方は梵文に照すに應に「我が爲めに普賢行を顯示するもの」と我。と常に願くは同じく集會せむ」とすべからず。善知識と顯示普賢行(者)と同格なる事梵文分明也。

## 第二五頌

समुद्य नित्यमहं जित पश्ये बुद्धयुतेभि परीवृत नाथान् ।  
तेषु च पूज करेय उदारं सर्वि ज्ञानागतकल्पमखिन्नः ॥ २५ ॥

धारयमाणु जिनान सद्धर्म बोधिचरिं परिदीपयमानः ।

भद्रचरिं च विशोधयमानः सर्वि ज्ञानागतकल्प चरेयम् ॥ २६ ॥

## 第二六頌

(二五)我は常に佛子に圍繞せられたる導師勝者を面見すべし。彼等に廣大供養をなし、盡未來劫無倦ならむ。

(二六)われ勝者の正法を受持しつゝ菩提行を輝かしめ、(普)賢行を淨めつゝ、盡未來劫に行ずべし。

〔晋 經〕「常見一切佛 菩薩衆圍繞 盡未來際劫 悉恭敬供養」<sup>(25)</sup>

「守護諸佛法 讚嘆菩提行 盡未來劫修 究竟普賢道」<sup>(26)</sup>

〔不空譯〕「常得面見諸如來 與諸佛子共圓滿 於彼皆興廣供養 皆於未來劫無倦」<sup>(25)</sup>

「常持諸佛微妙法 皆令光顯菩提行 咸皆清淨普賢行 皆於未來劫修行」<sup>(26)</sup>

〔貞元經〕「願常面見諸如來 及諸佛子衆圍繞 於彼皆興廣大供 盡未來劫無疲厭」<sup>(25)</sup>

「願持諸佛微妙法 光顯一切菩提行 究竟清淨普賢道 盡未來劫常修習」<sup>(26)</sup>

この二頌疏の第五供養の願と科するもの。

## 第二七頌

सर्वमेवेषु च संसराणाः पुण्यतु ज्ञानतु अक्षयप्राप्तः ।

प्रज्ञउपायसमाधिर्विमोक्षैः सर्वगुणैर्भवि अक्षयकोशः ॥ २७ ॥

第二八頌

एकरजापि रजोपमक्षेत्रा तत्र च क्षेपि ञ्चिचिनिम्य बुद्धान् ।  
बुद्धानामन निषण्णकु मध्ये पश्यिय बोधिचरिं चरमाणः ॥ ३८ ॥

(二七)一切諸有に流轉しつゝ、福智に於ては無盡に到達し、般若、方便、三昧、解脫、一切功德を以て無盡の藏なるべし。

(二八)一塵の端に塵(數)に等しき國土あり。其の國土に於て、われは菩提行を行じつゝ、佛子の中に坐せる不可思議の諸佛を見る。

〔晉經〕「雖在生死中 具無盡功德 智慧巧方便 諸三昧解脫」<sup>(23)</sup>

「一々微塵中 見不思議刹 於一々刹中 見不思議佛」<sup>(24)</sup>

〔不空譯〕「於諸有中流轉時 福德智慧得無盡 般若方便定解脫 獲得無盡功德藏」<sup>(27)</sup>

「如一塵端如塵佛 彼中佛刹不思議 佛及佛子坐其中 常見菩提勝妙行」<sup>(28)</sup>

〔貞元經〕「我於一切諸有中 所修福智恒無盡 定惠方便及解脫 獲諸無盡功德藏」<sup>(27)</sup>

「一塵中有塵數刹 一々刹有難思佛 一々佛處衆會中 我見恒演菩提行」<sup>(28)</sup>

此の二頌疏の第六利益の願と科するもの。

第二八頌第三頌と比較すべし。

貞元經第二十八偈第三句第四句は譯文極めて無理なり。梵文に照すに「一々の佛を衆會の中に處せる我は恒に菩提行を演じつゝ見たてまつる」と讀まざるべからず。衆會中に處するものは諸佛なりと見れば「衆會の中に處せる一々の佛を」なるべし。されど梵文の *nisapāka* は單數と見るが穩當なれば衆會の中に處するものは我なるべし。菩提行を演ずるものは當然佛にあらずして行者なる我、自分自身なること明かなり、この譯文は更に今一段の潤文を要するものなるべし。

### 第二九頌

एवमशेषत सर्वदिशसु बालपथेषु त्रियध्वप्रमाणान् ।  
बुद्धसमुद्रं य खेचसमुद्रानोतरि चारिककल्पसमुद्रान् ॥ २९ ॥

### 第三〇頌

एकस्वरङ्गसमुद्ररुतेभिः सर्वजितान स्वराङ्गविशुद्धिम् ।  
सर्वजगत्स यथाशयधोषान् बुद्धसरस्वतिमोतरि नित्यम् ॥ ३० ॥

### 第三一頌

तेषु च अख्यधोषरुतेषु सर्वत्रियध्वगतान जितानाम् ।  
चक्रनयं परिवर्तयमानो बुद्धिवलेन अहं प्रविशेयम् ॥ ३१ ॥

(二九)是の如く残りなく一切方處に於て、毛端に於て、我は三世量の佛海、國土海、修行者の劫



海に入らむ。

(三〇)一音聲海の語に於て一切諸佛の音聲清淨あり。常に一切衆生の意樂に隨ふ音聲、佛の辯才に入らむ。

(三一)我は智慧力によりて理趣輪を轉じつゝ一切三世に亘れる諸佛の彼等無盡の音聲語言の中に入らむ。

〔晉 經〕「見如是十方 一切世界海 一一世界海 悉見諸佛海」<sup>(25)</sup>

「於一言音中 具一切妙音 一々妙音中 具足最勝音」<sup>(26)</sup>

「甚深智慧力 入無盡妙音 轉三世諸佛 清淨正法輪」<sup>(27)</sup>

(不空譯)「如是无盡一切方 於一毛端三世量 佛海及與刹土海 我入修行諸劫海」<sup>(28)</sup>

「於一音聲功德海 一切如來清淨聲 一切群生音樂聲 常皆得入佛辯才」<sup>(29)</sup>

「於彼無盡音聲中 一切三世諸如來 常轉理趣妙輪時 於我慧力普能入」<sup>(31)</sup>

〔貞元經〕「普盡十方諸刹海 一一毛端三世海 佛海及與國土海 我徧修行經劫海」<sup>(29)</sup>

「一切如來語清淨 一言具衆音聲海 隨諸衆生意樂音 一々流佛辯才海」<sup>(30)</sup>

「三世一切諸如來 於彼無盡語言海 恒轉理趣妙法輪 我深智力普能入」<sup>(31)</sup>

この三頌疏の科して第七轉法輪の願となすもの。

第二九偈の意義は多くの諸佛及び國土及び行者の求道歷程を沈思して自らこれに没入せんと  
り、貞元經の第二九偈の譯文明了を缺く。少くとも第四句は「我入行者劫波海」とでも訂正すべ  
きものなり。

### 第三二頌

एकक्षणेन अनागतसर्वान् कल्पप्रेवश अहं प्रविशयम् ।  
ये ऽपि च कल्प त्रियध्वप्रमाणास्तान्क्षणाकोटिप्रविष्ट चरेयम् ॥३२॥

### 第三三頌

ये च त्रियध्वगता नरसिंहांस्तानहु पश्यय एकक्षणेन ।  
तेषु च गोचरिमोक्षरि नित्यं मायगतेन विमोक्षबलेन ॥३३॥

(三二)劫波に入る我は一刹那を以て盡未來(劫)に入るべし。三世無量劫波なる彼等に「一刹那際を  
以て入れるわれは行すべし。」

(三三)三世に亘る人師子なる彼等を「一刹那に我は見るべし。而して常に幻解脫力を以て彼等の境  
界に入るべし。」

〔晋 經〕「一切未來劫 能悉作一念 三世一切劫 悉爲一念際」<sup>(28)</sup>  
「一念中悉見 三世諸如來 亦普分別知 解脫及境界」<sup>(29)</sup>

「不空譯」「以一刹那諸如來 我入未來一切劫 三世所有無量劫 刹那能入俱胝劫」<sup>32)</sup>

「所有三世人師子 以一刹那我咸見 於彼境界常得入 如幻解脫行威力」<sup>33)</sup>

「貞元經」「我能深入於未來 盡一切劫爲一念 三世所有一切劫 爲一念際我皆入」<sup>32)</sup>

「我於一念見三世 所有一切人師子 亦常入佛境界中 如幻解脫及威力」<sup>33)</sup>

疏は科して第八淨土の願となすもの。語法第一頌と相似たり。貞元經第三三頌第四句につき疏に「六梵本此句無及威力字、有眷屬字、即住處衆生淨、人寶爲嚴故」と云ひ、鈔には「此句應云如幻解脫眷屬力故判爲住處衆生淨也」と云ふ。蓋し當時の梵本に

*Māyāvimokṣasagātānugatena*

とでもありしものか。現今の梵本にはこの義見えず。第三句と第四句は位置を轉反するを要す。即ち「如幻解脫力を以て常に佛の境界に入る」の意なり。

### 第三四頌

ये च त्रिषध्वमुखे विमूढांस्तानभिनिर्हरि एकाजाम् ।

एवमशेषत सर्वदिशामु श्रोतरि क्षेप विमूढ जिज्ञानाम् ॥ ३४ ॥

ये च अनानात लोकप्रदीपासेषु विबुधान चक्रप्रवृत्तिम् ।

निर्वृतिदर्शननिष्ठप्रशान्तिं सर्वि अहं उपसंक्रामि नाथान् ॥ ३५ ॥

### 第三五頌

(三四)三世妙莊嚴土なる彼等をわれ一塵端に現すべし。是の如く残りなく一切方に於て諸佛の莊嚴土に入るべし。

(三五)未來世間燈なる彼等は覺りて轉(法)輪すべし。涅槃を示現し、究竟寂滅ならむ。彼等世尊一切に我は往詣すべし。

〔晉經〕「於一微塵中 出三世淨刹 一切十方塵 莊嚴刹亦然」<sup>(30)</sup>

「悉見未來佛 成道轉法輪 究竟佛事已 示現入涅槃」<sup>(31)</sup>

〔不空譯〕「所有三世妙嚴刹 能現出生一塵端 如是无盡諸方所 能入諸佛嚴刹土」<sup>(32)</sup>

「所有未來世間燈 彼皆覺悟轉法輪 示現涅槃究竟寂 我皆往詣於世尊」<sup>(33)</sup>

〔貞元經〕「於一毛端極微中 出現三世莊嚴刹 十方塵刹諸毛端 我皆深入而嚴淨」<sup>(34)</sup>

「所有未來照世燈 成道轉法悟群有 究竟佛事示涅槃 我皆往詣而親近」<sup>(35)</sup>

この二頌は疏の科して第九承事の願とするものなり。第三四頌は第三頌及び第二八頌と比較すべし。貞元經の所依の梵本異なるものゝ如し。

### 第三六頌

सुखितेन समन्तजेन यानतेन समन्तमुखेन ।  
वर्धनेन समन्ताग्रेण मैत्रितेन समन्तांगेन ॥ ३६ ॥

第三七頌

पुण्यबलेन समन्तशुभेन ज्ञानबलेन असङ्गातेन ।  
प्रज्ञाप्राप्त्यसमाधिबलेन बोधिबलं समुदानयमानः ॥ ३७ ॥

第三八頌

कर्मबलं परिशोधयमानः क्लेशबलं परिमर्दयमानः ।  
माराबलं श्वबलं कर्माणः पूरयि भद्रचरीबलसर्वान् ॥ ३८ ॥

(三六) 普遍速疾の神通力を以て、普遍門なる乘力を以て、普遍功德の行力を以て、普遍至なる慈力を以て、

(三七) 普遍清淨の福力を以て、無着到達の智力を以て、般若方便三昧力を以て、菩提力を集めつゝ、

(三八) 業力を淨めつゝ、煩惱力を摧伏しつゝ、魔力を降伏しつゝ、一切(普)賢行力をわれは圓滿せむ。

〔晉 經〕「神力徧遊行 大乘法普門 慈力覆一切 行力功德滿」<sup>(36)</sup>

「功德力清淨 智慧力無礙 三昧方便力 逮得菩提力」<sup>(37)</sup>

「清淨善業力 除滅煩惱力 壞散諸魔力 具普賢行力」<sup>(38)</sup>

〔不空譯〕「以神足力普迅疾 以乘威力普遍門 以行威力等功德 以慈威力普遍門」<sup>(36)</sup>

〔以福威力普端嚴 以智威力無着門 般若方便等持力 菩提威力皆積集〕<sup>(37)</sup>

〔皆於業力而清淨 我令摧滅煩惱力 悉能降伏魔羅力 圓滿普賢一切力〕<sup>(38)</sup>

〔貞元經〕「速疾周徧神通力 普門徧入大乘力 智行普修功德力 威神普覆大慈力」<sup>(36)</sup>

〔徧淨莊嚴勝福力 無着無依智慧力 定慧方便威神力 普能積集菩提力〕<sup>(37)</sup>

〔清淨一切善業力 摧滅一切煩惱力 降伏一切諸魔力 圓滿普賢諸行力〕<sup>(38)</sup>

疏は科して第一〇成正覺の願とす。

第三八頌第三句、「魔力を降伏しつゝ」の降伏は不空譯及び貞元經に従ひしが、實は最初 avalam-kara と讀みしため明かなる能はず。西藏譯の འཇམ་མཐོག་པོ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་ に照して始めて「力無きやうになす」の意なれば a-balam-kara なることを知れり。

### 第三九頌

क्षेत्रसमुद्रं विशोध्यमानः सत्त्वसमुद्रं विमोचयमानः ।  
धर्मसमुद्रं विपश्यमानो ज्ञानसमुद्रं विगाहयमानः ॥ ३९ ॥

### 第四〇頌

चर्यसमुद्रं विशोध्यमानः प्रलिपिसमुद्रं प्रपूरयमाणः ।  
बुद्धसमुद्रं प्रपूजयमानः कल्पसमुद्रं चरेयमखिलः ॥ ४० ॥

第四一頌

ये च त्रियम्भगतान् जिनानां बोधिचरिप्रणिधानविशेषाः ।  
तानहं पूरय सर्विं झशेषान् भद्रचरीय विबुधिय बोधिम् ॥४१॥

(三九)刹土海を淨めつゝ、有情海を解脫せしめつゝ、法海を觀察しつゝ、智慧海に入りつゝ、  
(四〇)行海を淨めつゝ、願海を圓滿せしめつゝ、佛海を供養せしめつゝ、劫波海を無倦にわれ行  
すべし。

(四一)三世に亘れる諸佛の殊勝なる菩提行願なる彼等を我は一切残りなく圓滿すべし。(普)賢行  
を以てわれは菩提を證るべし。

〔普 經〕「嚴淨佛刹海 度脫衆生海 分別諸業海 究盡智慧海」<sup>(35)</sup>

〔清淨諸行海 滿足諸願海 悉見諸佛海 我於劫海行〕<sup>(36)</sup>

〔三世諸佛行 及無量大願 我皆悉具足 普賢行成佛〕<sup>(37)</sup>

〔不空譯〕「普令清淨刹土海 普能解脫衆生海 悉能觀察諸法海 乃以德源於智海」<sup>(38)</sup>

〔普令行海咸清淨 又令願海咸圓滿 諸佛海會咸供養 普賢行劫無疲倦〕<sup>(40)</sup>

〔所有三世諸如來 菩提行願衆差別 願我圓滿悉無餘 以普賢行悟菩提〕<sup>(41)</sup>

〔真元經〕「普能嚴淨諸刹海 解脫一切衆生海 善能分別諸法海 能甚深入智慧海」<sup>(39)</sup>

「普能清淨諸行海 圓滿一切諸願海 親近供養諸佛海 修行無倦經劫海」<sup>40)</sup>

「三世一切諸如來 最勝菩提諸行願 我皆供養圓滿修 以普賢行悟菩提」<sup>41)</sup>

この三頌以上の十願を結ぶとなす。

#### 第四二頌

अथ कु यः सुतु सर्वजिनानां यस्य च नाम समन्तभद्रः ।  
तस्य विदुस्य सभागवरीये नामयमी कुशलं इमु सर्वम् ॥ ४२ ॥

#### 第四三頌

कायतु वाच मनस्य विशुद्धिर्यविशुद्धाय क्षेत्रविशुद्धिः ।  
यादृश नामन भद्र विदुस्य तादृश भोगु समं मम तेन ॥ ४३ ॥

(四二)一切諸佛の長子にしてその名普賢と云へる彼の智者と同行せんがためにわれこの善根一切を回向せむ。

(四三)身語意の清淨、行の清淨、刹土の清淨、賢慧者の名の如く是の如くわれ彼と等しかるべし。

〔晉 經〕「普賢菩薩名 諸佛第一子 我善根回向 願悉與彼同」<sup>42)</sup>

「身口意清淨 自在莊嚴刹 逮成等正覺 皆悉同普賢」<sup>43)</sup>



「不空譯」「諸佛如來有長子 彼名號曰普賢尊 皆以彼慧同妙行 同向一切諸善根」<sup>(42)</sup>

「身口意業願清淨 諸行清淨刹土淨 如彼智慧普賢名 願我於今盡同彼」<sup>(43)</sup>

「貞元經」「一切如來有長子 彼名號曰普賢尊 我今同向諸善根 願諸智行悉同彼」<sup>(42)</sup>

「願身口意恒清淨 諸行刹土亦復然 如是智慧號普賢 願我與彼皆同等」<sup>(43)</sup>

疏は科して普賢に同ずとなす。此に偈讚は普賢に言及して彼を諸佛の長子と云ふ。

#### 第四四頌

भद्रचरीय समनशुभाये मञ्जुशिरी प्राणिधान चरेयम् ।

सर्वि ज्ञानागत कल्पमखिलः पूरयि तां क्रिय सर्वि ज्ञेयाम् ॥४४॥

#### 第四五頌

नो च प्रमाण भवेद्य चरीये नो च प्रमाण भवेद्य गुणानाम् ।

ज्ञप्रमाण चरियाय स्थित्वा जानयि सर्वि विकृर्वितु तेषाम् ॥४५॥

(四四)(普)賢行普ねく清淨ならんがためにわれ文殊師利の願を行すべし。盡未來劫無倦なるわれは彼の一切行を残るところなく圓滿せむ。

(四五)われ行に於て無量なるべし。又功德に就て無量なるべし。無量行に立ちて彼等一切神變を知るべし。

〔普 經〕「嚴淨普賢行 滿足文殊願 盡未來際劫 究竟菩薩行」<sup>〔4〕</sup>

〔不空譯〕「普賢行願普端嚴 我行曼殊室利行 於諸未來劫無倦 一切圓滿作無倦」<sup>〔45〕</sup>

〔所修勝行無能量 所有功德不可量 無量修行而住已 盡知一切彼神通〕<sup>〔46〕</sup>

〔貞元經〕「我爲徧淨普賢行 文殊師利諸大願 滿彼事業盡無餘 未來際劫恒無倦」<sup>〔47〕</sup>

〔我所修行無有量 獲得無量諸功德 安住無量諸行中 了達一切神通力〕<sup>〔48〕</sup>

疏は二聖に同すと科せり。蓋し此に普賢と相並んで文殊を出し來れり。疏の科は貞元經の四四、四五、四六の三頌なり。されど四六頌は梵本當らず。

貞元經第四四偈第一句第二句は梵文に照すに應に「我れ徧ねく普賢行を淨めんが爲めに文殊師利の諸大願を（行すべし）」と讀まざるべからず。これ一見無理なるが如きも、從來の如く「我れ徧ねく普賢行と文殊師利の諸大願を淨めんが爲めに」と讀みては梵文に相應せざるを奈何せむ。第三句第四句は位置轉反するを可なりとす。

#### 第四六頌

यावान्निष्ठ तमस्य भवेद्या सत्त्वं शशेषत निष्ठ तथैव ।  
कर्मतु क्लेशतु यावान्निष्ठा तावान्निष्ठ मम प्रणिधानम् ॥४६॥

（四六）虚空の究竟、有情無餘の究竟がある限り、業煩惱の究竟がある限り、その限に於て我が願

は究竟ならむ。

〔不空譯〕「乃至虛空得究竟 衆生無餘究竟然 及業煩惱乃至盡 乃至我願亦皆盡」<sup>(46)</sup>

〔貞元經〕「乃至虛空世界盡 衆生及業煩惱盡 如是一切無盡時 我願究竟恒無盡」<sup>(52)</sup>

此の下貞元經は復び出沒を生ぜり。即ち若干の偈を移して前に置けり。その中に阿彌陀佛に關する偈あり。

第四五頌以下の對照左表の如し。

梵 本	晉 經	不 空 譯	貞 元 經
45	—	45	45
46	—	46	52
47	—	47	53
48	—	48	54
49	—	49	55
50	—	50	56
51	—	51	57
52	—	52	58
53	—	53	59
54	—	54	60
55	40	55	46
56	41	56	47
57	45	57	48
58	43a	58	49
59	43b	59	50
60	—	60	51
61	—	61	61
62	—	62	62

第四六頌は疏科總頌十門となる。

第四七頌

ये च दशद्विंशि क्षेत्र अनन्ता एव अलंकृतु दद्यु जिनानाम् ।  
दिव्य च मानुष सौख्यविशिष्टां क्षेत्रज्ञोपमकल्प ददेयम् ॥ ४७ ॥

第四八頌

यश्च इमं परिणामनराजं श्रुतं सकृज्जानेयदधिमुक्तिम् ।  
बोधिं वरामनुप्रार्थयमानो अग्र्यु विशिष्ट भवेदिमु मुख्यम् ॥ ४८ ॥

(四七)寶莊嚴の刹土を諸佛に布施し、刹塵劫の間人天の勝樂を施さむ。

(四八)一たびもこの回向王を聞き勝菩提を渴仰しつゝ信解を生せん所の彼の福聚は殊勝第一なる  
なり。

「不空譯」「若有十方無邊刹 以寶莊嚴施諸佛 天妙人民勝安樂 如刹微塵劫捨施」<sup>(47)</sup>

「若人於此勝願王 一聞能生勝解心 於勝菩提生渴仰 獲得殊勝前福聚」<sup>(48)</sup>

「貞元經」「十方所有無邊刹 莊嚴衆寶供如來 最勝安樂施天人 一切塵刹微塵劫」<sup>(49)</sup>

「若人於此勝願王 一經於耳能生信 求勝菩提心渴仰 獲勝功德過於彼」<sup>(50)</sup>

疏科聞經の勝德を顯はすとなすもの。

第四七頌第二句に異本あり。「刹土を作爲し」となすものなり、かくては諸佛に人天の樂を施すと

讀まざるべからず。故に取らず。支那譯寧ろ順ふべし。

第四九頌

वर्जितं तेन भवन्ति अपाया वर्जितं तेन भवन्ति कुमित्राः ।  
एषु स पश्यति तं अभितामं यस्मिन् भद्रं चरि प्रणिधानम् ॥४९॥

(四九)この(普)實行願が屬する彼によりて惡趣は遠離せられたり。彼によりて惡友は遠離せられたり。また彼は速かに彼の無量光を見む。

〔不空譯〕「彼得遠離諸惡趣 彼皆遠離諸惡友 速疾得見無量壽 唯憶普賢勝行願」<sup>(49)</sup>

〔貞元經〕「卽常遠離惡知識 永離一切諸惡道 速見如來無量光 具此普勝最勝願」<sup>(50)</sup>

以下第五三頌に至る五頌は餘行の勝德を顯はすと科せり。されど前より一連にこの讚頌の功德を述ぶるものなり。

不空譯も貞元經もこの一偈の譯文肯綮に中らず。第四句を最初に回さば稍可ならむ。梵文は第四句に關係代名詞ありて第一句第二句及び第三句の代名詞に應せり。かくの如く見てこの一偈の意始めて明かなり。

第五〇頌

नाम सुलभ सुजीवतु तेषां स्वागत ते इमु मानुष जन्म ।  
यादृश सो हि समन्ततमद्रसे उपि तथा न चिरं भवन्ति ॥५०॥

(五〇)大利を得て彼等に勝命あらむ。彼等はこの人生に善來せむ。かの普賢の如く彼等も亦久しからずして是の如くなるべし。

〔不空譯〕「得大利益勝壽命 善來爲此人生 中 如彼普賢大菩薩 彼人不久當獲得」<sup>(50)</sup>  
〔貞元經〕「此人善得勝壽命 此人善來人中 此人不久當成就 如彼普賢菩薩行」<sup>(51)</sup>  
「勝命」とは「善き生活」の意なり、「善來」とは歡迎せらるゝこと。

### 第五一頌

पापक पञ्च अननारिप्रापि येन अज्ञानवशेन कृतानि ।  
सो इमु भद्रचरिं भणमानः क्षिप्रं परिश्रयु भोति अशेषम् ॥ ५१ ॥

(五一)その無智のために五無間の罪業を造りたる彼はこの(普)賢行を誦すれば(その罪業を)速かに残りなく消盡してあるべし。

〔不空譯〕「所作罪業五無間 由無智慧而所作 彼誦普賢行願時 速疾消滅得無餘」<sup>(52)</sup>  
〔貞元經〕「往昔由無智慧力 所造極惡五無間 誦此普賢大願王 一念速疾皆消滅」<sup>(53)</sup>

### 第五二頌

ज्ञानतु रूपतु लक्षणतश्च वर्णतु गोत्रतु भोतिरुपेतः ।  
तीर्थिकमारण्योभिरधुष्यः पूजितु भोति स सर्वचित्तोक्ते ॥ ५२ ॥

(五二)智慧、容色、相好、族類、種姓を具足し、外道魔群によりて摧伏せられざる彼は一切三界に供養せられむ。

〔不空譯〕「智慧容色及相好 族生品類得成就 於魔外道得難摧 當於三界得供養」<sup>(52)</sup>

〔貞元經〕「族性種類及容色 相好智慧咸圓滿 諸魔外道不能摧 堪爲三界所應供」<sup>(53)</sup>

長行相當の文に云く、

「此善男子、善得人身、圓滿普賢所有功德、(中略)速得成就微妙色身、(中略)如師子王摧伏群獸、堪受一切衆生供養、」

第五三頌

सिद्धं स गच्छति बाधिदुमेत् नान निधीदति सत्सहिताय ।  
बुध्यति बोधि प्रवर्तयि चक्रं धर्मयि सार ससैन्यकु सर्वम् ॥५३॥

(五三)彼は速に菩提樹王に行き、行きて有情利のために坐せむ。菩提を證りて(法)輪を轉じ、一切魔軍を摧伏せむ。

〔不空譯〕「速疾往詣菩提樹 到彼坐已利有情 覺悟菩提轉法輪 摧伏魔羅並從營」<sup>(54)</sup>

〔貞元經〕「速詣菩提大樹王 坐已降伏諸魔衆 成等正覺轉法輪 普利一切諸含識」<sup>(55)</sup>

第五四頌

यो इमु भद्रचरिप्रणिधानं धारयि वाचायि देशयितो वा ।  
बुद्धविज्ञाननि यो ऽत्र विमाको बोधि विधिष्ठ म काङ्क्ष जनेय ॥५४॥

(五四)この(普)賢行願を受持し、讀誦し、若くは開示する異熟ありと佛は辯知せり。殊勝菩提に疑惑を生ずる勿れ。

「不空譯」「若有持此普賢願 讀誦受持及演說 得如來具知果報 得勝菩提勿生疑」<sup>(54)</sup>  
「貞元經」「若人於此普賢願 讀誦受持及演說 果報唯佛能證知 決定獲勝菩提道」<sup>(55)</sup>

此の下結勸受持の偈。長行相當の文、「善男子、彼諸衆生、若聞若信此大願王、受持讀誦、廣爲人說、所有功德、除佛世尊餘無知者、是故汝等、聞此願王、莫生疑念、」(下略)

第五五頌

सञ्जुशिरी यथ जानति शूः स। च समन्तभद्र तथैव ।  
तेषु अहं अनुशिष्यमाणो नामयमी कुशलं इमु सर्वम् ॥ ५५ ॥

(五五)勇者文殊師利の知る如く、彼の普賢も是の如し、我は彼等に隨學しつつ、これら一切善根を回向せむ。

〔普 經〕「如文殊師利 普賢菩薩行 我所有善根 回向亦如是」<sup>(40)</sup>



〔不空譯〕「如妙吉祥勇猛智 亦如普賢如是智 我當修學於彼時 一切善根悉回向」<sup>(55)</sup>  
〔貞元經〕「文殊師利勇猛智 普賢慧行亦復然 我今回向諸善根 隨彼一切常修學」<sup>(56)</sup>  
文殊普賢を舉げてこれに倣はんことを陳ぶ。

貞元經第四六偈第三句第四句は位置を轉反するを要す。

第五六頌  
सर्वविषयधनतेभि जिनेभिर्या परिणामन वर्णिता अग्रा ।  
ताय अहं कुशलं इमु सर्व नामयमी वरभद्रचरिये ॥ ५६ ॥

(五六)一切三世に亘れる勝者によりて讃嘆せられたるこの最上廻向なるこの一切善根を我は勝  
(普)賢行に回向せむ。

〔晉 經〕「三世諸如來 所讚回向道 我回向善根 成滿普賢行」<sup>(57)</sup>  
〔不空譯〕「一切三世諸如來 以此回向殊勝願 我皆一切諸善根 悉以回向善賢行」<sup>(58)</sup>  
〔貞元經〕「三世諸佛所稱嘆 如是最勝諸大願 我今回向諸善根 爲得普賢殊勝行」<sup>(59)</sup>  
善根の總てを回向して普賢行を成就せんと陳ぶ。疏科結歸回向。

貞元經第四七偈第三句第四句は位置を轉反すべきもの。第二句最勝大願は梵本の異なるべし。

第五七頌

कालकृपां च अहं कारमाणो आवराणाच्चिनिवर्तिम सर्वान् ।  
संमुख परिश्रय तं अमिताभं तं च सुखावतिक्षेत्रं ब्रजेयम् ॥ ५७ ॥

(五七)我れ臨終の時、一切の障礙を除き、彼の無量光に面見し、又彼の極樂國土に往かむ。

〔晉經〕「願我命終時 除滅諸障礙 面見阿彌陀 往生安樂國」<sup>(57)</sup>

〔不空譯〕「當於臨終捨壽時 一切業障皆得轉 親觀得見無量壽 速往彼到極樂界」<sup>(57)</sup>

〔貞元經〕「願我臨欲命終時 盡除一切諸障礙 面見彼佛阿彌陀 卽得往生安樂刹」<sup>(58)</sup>

以下願生安樂世界の偈、四頌あり。

長行に相當の文を求むれば次の如し。

「又復是人、臨命終時、最後剎那、一切諸根、悉皆散壞、一切親屬悉皆捨離、(中略)唯此願王不相捨離、於一切時、引導其前、一剎那中、卽得往生極樂世界、」

第五八頌

तत्र गतस्य इमि प्रणिधाना आमुषि सर्वि भवेद्यु समयाः ।  
तांश्च अहं परिपूर्य अभिधानं सत्यहितं करि यावत् लोके ॥ ५८ ॥

(五八)其處に往きて現前にこの願は一切第一なるべし。世間に於て有情利樂のある限り、我れ彼

等を残りなく圓滿せむ。

〔晋 經〕「生彼佛國已 成滿諸大願」<sup>(43 a)</sup>

〔不空譯〕「得到於彼此勝願 悉皆現前得具足 我當圓滿皆無餘 衆生利益於世間」<sup>(53)</sup>

〔貞元經〕「我既往生彼國已 現前成就此大願 一切圓滿盡無餘 利樂一切衆生界」<sup>(49)</sup>

### 第五九頌

तहि जिनमहालि शोभनि रस्ये पद्मवरे दक्षिरे उपपन्नः ।  
आकाशे अहं तत्र लेभ्या संमुखतो अस्मिताभिजनस्य ॥ ५९ ॥

（五九）彼處に清淨にして樂むべき諸佛の會に於て微妙なる殊勝蓮華に生ぜむ。我は其處に無量光佛に面して授記を得む。

〔晋 經〕「阿彌陀如來 現前授我記」<sup>(43 b)</sup>

〔不空譯〕「於彼佛會甚端嚴 生於殊勝蓮華中 於彼獲得受記崩 親對無量光如來」<sup>(59)</sup>

〔貞元經〕「彼佛衆會咸清淨 我時於勝蓮華生 親觀如來無量光 現前授我菩提記」<sup>(50)</sup>

長行相當の文、「到已即見阿彌陀佛（中略）諸菩薩色相端嚴、功德具足、所共圍繞、其人自見、生蓮華中、蒙佛授記、」

貞元經の第五〇偈第四句「授我菩提記」は曖昧なり。此の場合「我れ」なる一人稱代名詞を主語

とする以上、「菩提記を得ん」若くは長行の文の如く「蒙佛授記」とすべきものなり。

### 第六〇頌

याकाणं प्रतिलभ्य च तस्मिन् निर्मितकोटिशोभितैर्नैकैः ।  
सत्त्वहितानि बहून्ग्रहं कुर्यादिष्टु दशस्वपि बुद्धिबलेन ॥ ६० ॥

(六〇)而してかしこに授記を得、多俱胝百の化身を以て、智慧力によりて我は十方に於て多くの有情利樂をなすべし。

「不空譯」「於彼獲得受記已 變化俱胝無量種 廣作有情諸利樂 十方世界以慧力」<sup>(60)</sup>  
「貞元經」「蒙彼如來授記已 化身無數百俱胝 智力廣大徧十方 普利一切衆生界」<sup>(61)</sup>  
長行相當文、「得授記已、經於無數百千萬億那由他劫、普於十方不可說不可說世界、以智慧力隨衆生心、而爲利益、」

### 第六一頌

भद्रचरिप्रणिधानं पठित्वा यत्कुशलं मयि संचितं किञ्चित् ।  
एकक्षणेन समुध्यतु सर्वं तेन जगस्य शुभं प्रणिधानम् ॥ ६१ ॥

第六二頌  
भद्रचरिं परिणाम्य यदासं पुण्यमनन्तमतीव विशिष्टम् ।  
तेन जगद्वासनोधनिमग्नं यानामितामपुरिं वारमेव ॥ ६२ ॥

(六一)(普)賢行願を誦して我によりて何等か集められたるかの善根あらむに、それによりて一刹那に衆生一切の清淨願は成就せよかし。

(六二)(普)賢行を回向して得られたる、無邊にして極めて殊勝なるかの福德によりて、厄難の瀑流に沈める衆生は最上なる無量光宮に往けよかし。

〔不空譯〕「若人誦持普賢願 所有善根而積集 以一刹那得如願 以此群生獲勝願」<sup>(61)</sup>

「我獲得此普賢願 殊勝無量福德聚 所有群生溺惡習 皆往無量光佛宮」<sup>(62)</sup>

〔貞元經〕「若人誦此普賢願 我說少分之善根 一念一切悉皆圓 成就衆生清淨願」<sup>(63)</sup>

「我此普賢殊勝行 無邊勝福皆回向 普願沈溺諸衆生 速往無量光佛刹」<sup>(64)</sup>

この二頌、疏は科して結勸受持の文とす。第五四頌に連續す。

長行相當の文、「是諸人等、於一念中、所有行願、皆得成就、所獲福聚無量無邊、能於煩惱大苦海中、拔濟衆生、令其出離、皆得往生阿彌陀佛極樂世界、」